

成果報告書

記入日 2019年 2月 12日

氏名： 佐野洋輔	渡航先国名 インドネシア	所属機関 ムラワルマン大学社会林業センター
研究テーマ：ボルネオ島アポ・カヤン地域における商業狩猟採集社会の動態		
研究期間： 2016年 12月 ～ 2018年 12月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>商業狩猟採集活動を経済基盤とする狩猟採集民の村に2年間滞在し、年間世帯経済調査、慣習的資源保全制度の調査、友情名文化の調査、民話調査を行った。当該社会は高い現金収入と分配慣行により世帯生計を維持していたが、慣習的保全制度は販売用林産資源の持続的利用を担保するものではなかった。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>1. 背景と目的</p> <p>本研究の目的は、ボルネオ島アポ・カヤン地域の狩猟採集社会の動態を、商業狩猟採集活動に着目して明らかにすることである。これにより、焼畑農耕社会で進む商品作物栽培を基盤とした地域発展とは異なる狩猟採集社会の商業狩猟採集を基盤とした地域発展の可能性を検討したい。</p> <p>ボルネオ島内陸部の狩猟採集社会は、従来の自給目的の狩猟採集を基盤とする暮らしから、現在、販売目的の商業狩猟採集を基盤とする暮らしへと変化している。彼らは、定住村で農耕を営みつつも、森で得た香木や籐や胃石を販売してコメを含む食料品を購入して生活している。</p> <p>商業狩猟採集社会は、狩猟採集民としての在来知を生かして生計を立てられる上に、森林の大きな変化を伴わないという点で理想的だが、一方で商業狩猟採集は現金収入として不安定で、また、過剰な狩猟圧・採集圧がかかれば森林資源が枯渇してしまう。そのため、商業狩猟採集を基盤とする社会ではどのように生計が維持され、森林生態にどのような影響を及ぼし得るのかを理解する必要がある。</p> <p>そこで、報告者はボルネオ島インドネシア領の内陸部アポ・カヤン地域において、アプット・プナン人という狩猟採集民の村で2年間の滞在型フィールドワークを実施した。</p> <p>2. 年間世帯経済調査—商業狩猟採集社会の経済的側面</p> <p>商業狩猟採集の問題点に、収入の不安定性がある。販売用の林産物は高価だが稀少性が高く、1か月森に入って数十万円分の林産物を得ることがある一方で、全く林産物が得られないこともある。しかし、貨幣経済が浸透した調査村では、日々の生活のために一定の現金収入を必要としている。</p> <p>商業狩猟採集の収入が不安定な中で、世帯はどのように生活を安定させているのか。これを明らかにするために、年間世帯経済調査を実施した。12世帯を対象に、1年間、対象世帯を毎日訪問して必要情報（日ごとの現金収入、現金支出、夕食内容、世帯主と配偶者の生計活動）を聞き取り、一年間の完全</p>		

な世帯経済データを得ることを目指した。この調査は、現地の調査助手の協力を得て現在も継続的であるため、以下では暫定的な成果を示す。

当座の現金のない欠乏期の世帯は、近所と親類からの分配により食物を得て、さらに他世帯からの雇用労働により現金を得て生活を維持していた。商業狩猟採集による年間収入は日本円で年間 30 万から 100 万円程度でインドネシアの経済水準で見れば高水準だったが、短期間で全ての現金を支出してしまう世帯が多く、商業狩猟採集の収入だけではコメ、塩、砂糖などの生活必需品の購入ができない状況にしばしば陥っていた。当座の現金のない世帯は食物分配と雇用労働により生活を維持できる背景には、当該社会における食物分配の義務と雇用労働の義務があった。食物については、狩猟により獲た獣肉は近所に分配することが義務とされ、また、コメを除く農作物も乞われれば与えなくてはならないとされていた。現金については、食物のように直接分配されることは稀だが、香木採集等で多額の現金を得た世帯は農作業等で他世帯を雇用して現金を分けることが義務とされていた。この年間世帯経済調査の成果は、今後詳しい分析を進め、地域研究のジャーナルに論文として投稿する。

3. 森林資源の慣習的管理システムの調査—商業狩猟採集の生態学的影響

商業狩猟採集のもう一つの問題点として、過剰な狩猟圧・採集圧により森林資源が枯渇しやすいという点がある。そこで、調査村の商業狩猟採集実践が森林資源の持続的利用を可能とするものになっているのかを明らかにするために、森林資源の慣習的管理制度の聞き取り調査と商業狩猟採集実践（沈香採集、籐採集、リーフモンキー猟）の参与観察を実施した。

調査の結果、森林資源の保全に寄与する慣習的な管理制度があるが、適用対象の資源が限定されており、販売用林産物の利用は持続性が確保されていなかった。以下、詳しく説明する。

聞き取り調査の結果、森林の野生樹木を個人が所有できる慣習的制度（現地語で *matiq*）の存在が確認された。野生樹木は、定められた印を樹体に刻み入れることで個人がその個体を所有できる。

この仕組みは、林産物の持続的利用のために重要なものである。例えば、所有者のない野生果樹は果実を一度に大量に収穫するために切り倒されることがある。一方、所有者のいる野生果樹は、所有者自身は結実期の度に果実の収穫ができることを重視するために滅多に切り倒すことはない。さらに、所有者の死後には所有権は親族に相続され、何世代にもわたってその樹木は維持される。

しかしながら、慣習上所有が可能な野生樹木は、果樹、ミツバチの営巣木、サゴヤシなどに限られ、香木や籐などの販売用林産物は印を付けても所有権が認められず、フリーアクセスの状態にあった。また、野生動物も利用を制限する慣習的仕組みはなかった。

参与観察の結果、沈香採集、籐採集、リーフモンキー猟において、資源の持続的利用のための配慮は確認されなかった。近年、過剰な狩猟圧により内陸部一帯で激減したオナガサイチョウについても、未だに狩猟対象として狙われ、商業狩猟による枯渇は仕方ないこととされていた。

4. 友情名の分布調査—ボルネオ狩猟採集社会の文化①

以下の友情名と民話は、研究計画にはなかったが留学中に研究課題を見つたため調査を実施した。

アポ・カヤン地域の狩猟採集社会とボルネオ島他地域の狩猟採集社会との文化的共通性を明らかにするために、調査村周辺の友情名文化の調査を実施した。

調査村での滞在が半年を過ぎ、現地語（アプット・プナン語）での会話が可能になると、マレーシアの東プナン社会固有の文化とされる友情名文化が調査村にも存在することに気付いた。友情名文化とは、二者の友人同士が同名のニックネーム（友情名）で互いを呼び合うという、世界でも東プナン社会のみで確認されていた呼称システムである。なぜ地理的・言語的に距離の遠い東プナン社会と同じ文化が調査村に存在するのか。この呼称システムは、どんな民族に分布しているのか。これを明らかにすることは、未だに不明点の多いボルネオ島の狩猟採集社会の来歴を解明する手がかりになる。

調査では、調査村において成人男女から友情名の実例を収集すると同時に、調査村周辺の農耕民集落と狩猟採集民集落を訪ね、友情名文化の有無を調べた。調査の結果、調査村の友情名は、接頭辞” ke”が付かない点で東プナン社会とは異なるが、名づけのパターンは非常に似ていた。相手との距離感を縮めるために友情名を付けるという点も共通していた。また、この友情名文化は、周辺の焼畑民社会（ケニヤ人諸族やカヤン人）には存在しないのに対し、多くの狩猟採集社会（リスム・プナン社会、クヒ・プナン社会、ベカタン社会）に共通して存在していた。このことから、友情名文化はボルネオ島内の広範囲の狩猟採集社会に共通する文化であることが示唆された。この研究成果は、2020年に開催される Borneo Research Council（ボルネオ地域研究の国際学会）において発表する。

5. 民話の調査—ボルネオ狩猟採集社会の文化②

アポ・カヤン地域の狩猟採集民の民話世界を理解するために民話収集を行った。35話（計16時間分）を録音し、現時点で内28話の書き起こしを終えた。

調査村の民話は、動物を主人公とする短めの寓話と人間を主人公とする長めの物語に分けられる。人間を主人公とする民話では、英雄リランとその恋人イニヤを主人公とする一連の物語が17話もあり、1話で1時間を超える長大なものもあった。このリランの民話では、当該社会の男女の理想像が投影され、夢見を通じた精霊との精神的関わりが示され、様々な狩猟法や過去の慣習が語られるなど、当該社会の文化が様々な形で埋め込まれていた。

さらに、収集した民話を周辺民族の民話と比較し、次のことが分かった。第一に、英雄リランの民話群は、周辺の焼畑農耕社会には存在しないが、周辺の4つの狩猟採集社会（リスム・プナン社会、クヒ・プナン社会、ベカタン社会、ブハン・プナン社会）にも存在し、調査村周辺の狩猟採集社会は共通の民話世界を有していた。第二に、リランの民話群は、地理的・言語的に距離の遠い焼畑民イバン人社会の英雄民話と物語の構造が類似していた。

今後は収集した民話の翻訳を進め、日本語で出版することを目指している。

6. まとめ—商業狩猟採集社会の可能性

アポ・カヤン地域の狩猟採集社会は、現金収入が高水準で生計はある程度安定していたが、販売用林産物は慣習的保全制度の適用範囲外であった。そのため、過去にスマトラサイやオナガサイチョウが過剰な狩猟圧により枯渇したように、重要な販売用林産物の枯渇が今後も起こる可能性がある。それゆえ、今後は、焼畑民と同様に商品作物栽培へと生業の全面的転換を図るのか、慣習的保全制度を販売用林産物に拡張することで長期的に商業狩猟採集を基盤とした暮らしを維持するのか、住民自身が選択する必要がある。

留学中の生活・研究でのトピックス

狩猟採集民の村での2年間の生活ということもあり、狩猟を通じて様々なことを学んだ。調査村での主な副食はイノシシ肉であり、若い男性は定期的に森でイノシシを獲てくることが期待される。ある夫婦の家に養子として迎えられた報告者は、村の若者として、養父にもらった槍を携え、同世代の若者と犬を連れて何度もイノシシ狩りへ出かけた。

第一に、イノシシ狩りは、村人にとって生きるための食料確保の手段であり、販売による現金獲得手段でもあるが、何よりもまず遊びであると感じた。同世代の若者とお喋りしながら森を歩き、犬が吠えて追い立て始めるとみんなで必死に走り回って獲物を追うイノシシ狩りは、疲れるけれどいつも楽しいものだった。イノシシ狩りのおかげで、気軽に話せる同世代の友人が何人もできた。

第二に、獣肉の分配慣行を村人同士の自然な支え合いの形として実感できた。仕留めたイノシシは、森でそのまま解体され、量が均等になるように狩猟参加者全員に肉が分配される。この肉を背負い籠に詰めて歩いて家に持ち帰ると、今度はさらに細かく肉が切り分けられ、10皿前後に分け、近所の家々に分配される。5人で狩猟に行けば、獲れた肉は森で分配され、さらに村で分配され、延べ50世帯ほどに配られる。自分の獲ってきた獣肉の大半が近所に分けられてしまうのは惜しい気もしたが、冷蔵庫のない高温多湿の調査村では肉は3日ほどで腐ってしまう。少量の肉を頻繁に分け合う分配慣行はとても合理的なものだと感じた。

第三に、人間と犬の共存関係を実感した。猟犬を用いたイノシシ狩りでは、狩猟の成否は獲物を追い詰める猟犬の能力にかかっている。犬が獲物を追い詰めなければ人間は肉を得られず、人間が槍で止めを刺さなければ犬だけでは止めが刺せず肉が食べられない。調査村では、熱帯林で生き延びるためのパートナーとしての人間と犬が結ばれていた。子犬は丹精を込めて家の中で育てられ、狩りで怪我をした犬は人間が背負って村まで持ち帰って看病され、優秀な犬は死後も人びとの間で語り継がれる。

報告者にとって留学中の狩猟を通じた経験が非常に印象深く、帰国後すぐに都心から野生動物の多い山村に移住し、猟犬を飼い始めた。以上のように、今回の留学は研究として有意義だっただけでなく、日本での報告者の暮らしを根本から変える貴重な体験となった。

今後の社会貢献

第一に、本研究の成果を雑誌論文や博士論文という形で公表することにより、学術面でボルネオ地域社会へのより深い理解や森林環境と調和とした地域発展に貢献する。英語と日本語はもちろん、インドネシア国内のジャーナルに投稿したり、研究会で発表し、インドネシア語でも成果を発信したい。

第二に、本研究で収集した民話を日本語で翻訳出版することにより、ボルネオ狩猟採集社会の文化を日本に紹介することを目指す。民話では、森での暮らし、色恋沙汰、野生動物との関係、精神世界などを物語という親しみやすい形で描かれており、良い読み物になると考えている。

第三に、本研究で二年間暮らした調査村の人びとの権利保護活動を側面支援することで、彼らの暮らしの安定と発展に貢献する。報告者の調査村では、村落間の地理的な境界線が曖昧であり、近年、伐採企業、農園開発企業、金鉱開発企業の進出が進む中で、村落間で境界紛争が発生している。これについて、報告者は首長層の求めに応じて周辺の森林・河川地図を作成し、集落間での境界画定作業を側面的に支援してきた。今後も、報告者は調査村でこのような役割を求められており、可能な範囲で支援していく。



写真 1. 槍を手にイノシシを求めて森を歩く狩猟者



写真 2. 獲れたイノシシ肉を狩猟参加者で均等に分配する



写真 3. 船上から獲物の匂いを探る猟犬たち